

## [調査研究]

## 東北大学附属図書館で発見されたオーウェン自筆本について

— Richard Owen's Autographs in Tohoku University Library —

小川 知幸

## 1. はじめに

2019年（令和元）11月開催の東北大学附属図書館企画展「進化×深化 蔵書でたどる『種の起源』への道のり」の準備中、北青葉山分館においてリチャード・オーウェンの自筆本とみられる蔵書が発見された（図1）。同展はチャールズ・ダーウィン生誕210周年を記念して企画されたものであり、タイトルからもわかるように附属図書館の蔵書のなかからダーウィンの「進化論」に関連する書籍を選定して出展するという趣旨である。本書はそのような書籍の探索中に図書館員によって発見され、筆者がその鑑定の依頼を受けた。

リチャード・オーウェン（Richard Owen, 1804 – 1892）は、19世紀の比較解剖学・古生物学者であり、「相同」と「相似」の理論を提唱し<sup>1</sup>、この分野の先駆者であったフランスのジョルジュ・キュヴィエになぞらえて「イギリスのキュヴィエ」と称された人物であった<sup>2</sup>。また、現在はロンドン自然史博物館（Natural History Museum in South Kensington, London）と呼ばれている大英博物館自然史分館の創設に尽力し、1883年にはナイトの称号を授けられた。とりわけ、「恐竜」（dinosaur）ということばを創出したことで科学史に大きな足跡を残したが<sup>3</sup>、ダーウィン理論に対しては終生反対の立場を表明しつづけたために、現代にいたるまで何度も称揚される偉人とはならなかった<sup>4</sup>。

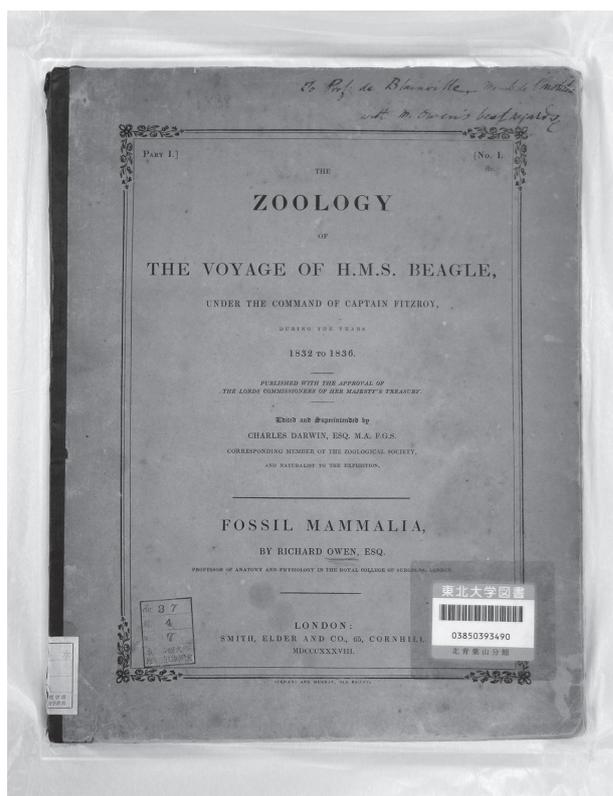


図1 オーウェン自筆本『軍艦ビーグルの航海における動物学』

1 ロバート・ハクスリー（植松靖夫 訳）『西洋博物学者列伝 アリストテレスからダーウィンまで』悠書館、2009年、255 – 260頁参照。  
 2 E.H. コルバート（小島郁生・亀山龍樹 訳）『恐竜の発見 よみがえる前世紀動物』早川書房、1969年、45頁以下、また、矢島道子『化石の記憶 古生物学の歴史をさかのぼる』東京大学出版会、2008年、116頁以下参照。  
 3 オーウェンが創出した dinosaur、もとのラテン語では dinosauria であるが、これはギリシア語の deinós（恐ろしい）および saúra（トカゲ）から合成されたことばであり、すなわち terrible lizard の意味である。1882年に正式に提唱したという。クリストファー・マガウワン（高柳洋吉 訳）『恐竜を追った人びと

ダーウィンへの道を開いた化石研究者たち』古今書院、2004年、236頁（原著 The Dragon Seekers, by Christopher McGowan, Perseus Publishing Cambridge, Massachusetts, 2001）。また、このことばに「恐竜」という訳語を当てはめたのは帝国大学理科大学教授の横山又次郎（1860 – 1942）であった。主著『古生物学綱要』早稲田大学出版部、大正9年（1920）では、「恐龍類」という記述が見られる（458頁以下）。  
 4 2016年2月26日付けのBBCニュースでは、イギリス生物学会によって据え付けられた10枚の青色の銘板（blue plaques）に刻まれた人物「Unsung heroes」（忘れられた英雄たち）の筆頭として、リチャード・オーウェンを紹介している。https://www.bbc.com/news/uk-england-lancashire-31623397

しかしながら、1980年代ころから再評価の動きが現れ、ダーウィン理論との関係も見直されてきたようである<sup>5</sup>。本稿ではその点には深く立ち入らないが、この自筆本がダーウィン編・監修、オーウェン著の『軍艦ビーグルの航海における動物学』第1部第1巻(ロンドン、1838年刊)であったことから、まず書誌等を解説し、オーウェンがダーウィンと出会うまでの半生とその研究、そしてこの書籍が東北大学に所蔵されるにいたった経緯を論じてみたい。

## 2. 書誌記述, オーウェンがダーウィンに出会うまで

ダーウィンに直接かかわる出版物・手稿等は Darwin Online というウェブサイトにおいてある程度集積されており<sup>6</sup>、本学自筆本にかんしてもこのサイトにしたがって出版物としての書誌を記述すれば、つぎのようになる。

Darwin, C. R. ed. 1838. Fossil Mammalia Part 1 No. 1 of The zoology of the voyage of H.M.S. Beagle. By Richard Owen. Edited and superintended by Charles Darwin. London: Smith Elder and Co. Includes by Darwin: Preface pp. [i]-iv and Geological introduction (pp. 3-12).

このタイトルの日本語での定訳はとくに存在しないが、上記のように、

ダーウィン編・監修、オーウェン著『軍艦ビーグルの航海における動物学 第1部 化石哺乳類 第1巻』ロンドン、1838年刊

ということでありたい。さて、本書はチャールズ・

ダーウィン (Charles Darwin, 1809 - 1882) が軍艦ビーグルによる約5年にわたる航海(1831年12月から1836年10月まで)の後、1838年2月から1843年10月にかけて5部構成全19巻で編・監修した報告書の第1巻であり、オーウェンによって著された<sup>7</sup>。

表紙右上部には、「8s」(シリング)の価格表示がある<sup>8</sup>。

それでは、リチャード・オーウェンとはどのような人物であったのか<sup>9</sup>。

リチャード・オーウェンは1804年7月20日にイングランドのランカスターで同名の父と母キャサリンとの間に生まれた。貿易商であった父は、リチャードが5歳のときに他界したが、その後リチャードはランカスター・グラマー・スクール(中等教育を担う公的な教育機関)に入学し、1820年、16歳のときに、かれが教えを受けた外科医のもとで徒弟の修行をはじめた。医者になることは生計を立てる上で手取り早い方法であった。しかし、見習いとして刑務所などでの検死や解剖に立ち会ううちに解剖学への強い関心が芽生えたという。年季奉公も開け遣らぬ1824年10月にエディンバラ大学に学籍登録し、医学部の講義を受講しはじめた。ところが、その講義はあまり満足できるものではなかったらしい。まもなく、学外でおこなわれていた評判の良い解剖学者ジョン・バークレイ(John Barclay, 1758 - 1826)の講義に通いだし、そこで比較解剖学についての幅広い知識を得た。

翌年4月になると老齢のバークレイはオーウェンに、ロンドンのセント・バーソロミュー病院に行つて外科医のジョン・アバネシー(John Abernethy, 1764 - 1831)について学ぶよう勧め、紹介状をもたせたという。アバネシーも若いころは青年オーウェンと似た経歴の持ち主であった。さつそくオーウェンは解剖助手に任命

5 松永俊男「リチャード・オーエンの進化論への対応」『桃山学院大学人間科学』No.28, 2004年12月, 1-13頁参照。

6 <http://darwin-online.org.uk/>

7 上記 Darwin Online によれば、ダーウィンは航海後に動物学的成果を出版したいと考え、1837年に政府から1,000ポンドの助成を得たが、それでも不足して出版社の負担と私費からの支出をもって補ったという。部冊の構成が決定し、オーウェンの執筆した第1部分冊第1巻は1838年1月1日に刊行する予定だったが、出版は2月にずれ込んだ。内容見本によれば、当初のもくろみでは「2か月ごとの月初めに発行され、全巻揃いのあかつきには約600頁のテキスト、200から250枚の銅版画からなるでしょう」とのことだったが、最終的にテキストは632頁に達したものの、銅版画は予定の8割から6割の166枚にとどまった。原因は、どの部分を誰に執筆させるかという編・監修者としての進行管理の難しさにあったようである。ちなみに、執筆者は、第1部「化石哺乳類」第1巻から第4巻のリチャード・オーウェンのほか、第2部「哺乳類」第1巻から第4巻

ジョージ・ウォーターハウス、第3部「鳥類」第1巻から第5巻ジョン・グールド、第4部「魚類」第1巻から第4巻レナード・ジュニス、第5部「爬虫類」第1巻から第2巻トマス・ベルの5名であった。分冊は全巻揃いで8ポンド15シリングの価格で販売されたという。本稿の自筆本はこの分冊であるが、併行して、部門ごとに合冊されたものも販売されたらしい。こちらは全巻で9ポンド5シリングに値付けされた。

8 1ポンド=20シリングであり、単価8シリングを19倍すると152、これを20で割ると7.6になる。おそらく他巻も8シリング前後で販売されたことがわかる。

9 以下ではOxford Dictionary of National BiographyのJacob J. GruberによるOwen, Sir Richardの項目(Published in print: 23 September 2004, Published online: 23 September 2004)および、Encyclopedia.comのOwen, Richardの項目を参照した。後者におけるおもな典拠はWesley C. Williamsによる、Complete Dictionary of Scientific Biography, 2008の記述である。

され、実地経験を積み重ね、1826年8月には王立外科医師会 (Royal College of Surgeons) の一員となった。

晴れて医業を修め外科医となった22歳の若きオーウェンは、医師として開業することもできたが、そうはしなかった。解剖学の道を突き進んだのである。

王立外科医師会の会長でもあったアバネシーは、1827年にオーウェンをハンテリアン・コレクションの管理者であったウィリアム・クリフト (William Clift, 1775 - 1849) の助手に指名した。これによりオーウェンは初めて俸給のある職位につくことになった<sup>10</sup>。ハンテリアン・コレクション (Hunterian Collection) とは、外科医で解剖学者であったジョン・ハンター (John Hunter, 1728 - 1793) の収集した、1万4,000点ともいわれる膨大な人体・動植物・骨格などの解剖学標本のコレクションを政府が買い上げ、その目録を作成するという条件で王立外科医師会に譲渡したものである<sup>11</sup>。このコレクションは王立外科医師会のあるたてものであった標本室 (museum) の重要な一部となっていたが<sup>12</sup>、ハンターの作成した目録やメモを、王立外科医師会の初代会長であったエヴェラード・ホーム卿 (Everard Home, 1756 - 1832) が剽窃の発覚をおそれ焼き捨ててしまったので、標本目録をつくるには新たな解剖をする必要もあり困難をきわめた。だが、オーウェンはクリフトを補佐し、また主導し、1830年までに目録を完成に導いた。この仕事は比較解剖学者、生物学者としてのオーウェンを鍛え抜いたようである。大きな信頼を得て、1835年にはクリフトの一人娘キャロラインをめとった。かくて、名実ともにクリフトの跡継ぎとなったのである<sup>13</sup>。

少し遡って1830年、パリから著名な博物学者がハンテリアン博物館を訪れた。ジョルジュ・キュヴィエ (Georges Cuvier, 1769 - 1832) であった。フランス語の苦手なクリフトに代わり、オーウェンが案内役となった。比較解剖学の世界的権威であったキュヴィエを前にして興奮をおさえるのに必死であったことは想像に

難くない。しかも、キュヴィエは翌年、案内の礼にと、かれが設立したパリ植物園にオーウェンを招いた。およそ1か月のパリ滞在中、オーウェンはキュヴィエの講演を聴講し、またそのコレクションを見学し、さらにキュヴィエとサン＝ティレル (Étienne Geoffroy Saint-Hilaire, 1772 - 1844) のあいだで紛糾していた、ある論争に接した。それは、あらゆる動物および化石を詳細に比較すれば、そこに器官の相似を見出すことができ、「共通の設計図」が明らかになるだろう、というサン＝ティレルの形態論に対する、構造は機能によって決まるというキュヴィエの機能主義の対立であった。ある意味では師弟対決のような論争であったが、オーウェンにはサン＝ティレルが正当にして有益な原理である相似を「濫用」していると映ったようである<sup>14</sup>。いずれにせよ、後年、オーウェンはこれを「相同」(homology) と「相似」(analogy) に区分し<sup>15</sup>、生物の構造の根源には同じ出発点、すなわち「原型」(Archetype) のようなものがあるのではないかと考えはじめた。

話を戻したい。この間もオーウェンはセント・バーソロミュー病院での任意の講義や診察、そして解剖学の仕事に精を出し、また、ロンドン動物学会の動物園で死んだめずらしいオランウータンの解剖結果を発表したりした。とくに注目されたのは論文『オウムガイについての覚え書き』であり<sup>16</sup>、その他多くの緻密な解剖学的研究成果をもって、1836年に33歳の若き俊英として、王立外科医師会の比較解剖学・生理学ハンテリアン教授に就任することになった。

ところで、チャールズ・ダーウィンは1809年2月12日生まれであり、オーウェンの5歳下であった。裕福な家庭に生まれ、1825年にエディンバラ大学に学んだが1827年にはケンブリッジ大学に移ったのでオーウェンとはすれ違いであった。

1836年10月のある日、オーウェンの妻キャロラインのたずさえてきた手紙の束のなかに、チャールズ・ライエルの手紙があった。ライエル (Charles Lyell, 1797 -

10 俸給額は当初は四半期に30ポンド、したがって年間120ポンドであったが、やがて年俸150ポンドに昇給した。この金額は、単身者が何とか暮らしていけはしたが、家族を養うにはまだ十分とはいえなかったようである。上記 Oxford Dictionary of National Biography 参照。

11 このコレクションには、ジェームズ・クックの南太平洋航海に同行した博物学者ジョセフ・バンクス (Joseph Banks, 1743 - 1820) が収集した標本も多数含まれていたという。マガワン、上掲書、197頁。

12 ハンテリアン・ミュージアムの歴史は、ウェブ上で読むことができる。https://www.rcseng.ac.uk/museums-and-archives/hunterian-museum/about-us/history/

13 クリフトには同様に博物館の助手であった同名の息子ウィリアムがいて、跡継ぎを期待されていたが、不幸にも事故で早逝した。マガワン、上掲書197 - 200頁。

14 マガワン、上掲書、204頁。

15 「相同」は発生学的に同じ起源に由来する器官同士の関係のこと。機能は同じだが起源がことなる場合は「相似」という。

16 Memoir on the Pearly Nautilus (*Nautilus Pompilius*, Linn.)

1875)は『地質学原理』(Principle of Geography)の著書であり、これをダーウィンが軍艦ビーグルに乗り込んでいたとき夢中になって読み耽ったことでも知られている。刊行されたばかりの第1巻を船長フィッツロイが出航時22歳のダーウィンにあたえたのである。

ともあれ、開封した手紙にはつぎのようにあった<sup>17</sup>。

「小生と妻とで翌週の土曜日の早めの8時のお茶会にて数名の友人とともにお待ちしております。わけても地質学者・動物学者としてご活躍の、先頃南米からご帰国されたチャールズ・ダーウィン氏をお招きしております」。

ライエルはロンドンのキングズ・カレッジの教授であり、オーウェンと互に行き来する仲だった。いつものお茶の誘いであったが、客人の名が目をついた。若干27歳のダーウィンは、周航中すでに本国の有名人になっていた。

10月29日の朝、オーウェンは妻を伴ってライエル宅を訪問し、ライエルが招じ入れた馴染みの部屋で、ダーウィンと初めて出会った。後日ダーウィンがライエルの優しさと親切さに感謝を述べていることから推測すると、お茶会は和やかに始まり、やがて皆ダーウィンの体験談に耳を傾け、互いに意見を述べ合い、愉しくかつ有意義なものに終わったようである。ダーウィンは南米で採集し軍艦ビーグルで運んできた多数の化石骨標本をオーウェンに委ねることを約束した。

同年末に、ダーウィンは敬愛するライエルの住むロンドンにしばらく居を定めることにして、地質学にかんする論文を執筆するかたわら、自分のコレクションを研究してくれる専門家を探しつづけた。鳥類は画家でもあったジョン・グールドに、化石の一部はおそらく1832年からオーウェンの知人でもあった地質学者のウィリアム・バックランド(William Buckland, 1784 - 1856)にも依頼した。しかし、じつさい、ダーウィンが荷ほどぎしたその標本の大半は、ハンテリアン博物館に送付された。オーウェンは、化石が届くと直ちに研究を開始した。

比較解剖学者であったオーウェンは、これまで古生物学の研究に手を染めたことはなかったが、いくつかの化石骨を調べるうちに、それらが新属の大型哺乳類のものであることに気づいた。そのひとつには、「弓状の歯」という意味の「トクソドン」(*Toxodon*)と名付け、また、別のものには「彫刻された歯」という意味で「グリプトドン」(*Glyptodon*)と名付けた。後者は、現在のアルマジロに似た甲羅をもっていたが、カバほどの大きさがあつた。さらに、「メガテリウム」(*Megatherium*)と名付けられた哺乳類は、現在のナマケモノの近縁であつたが、ゾウ並みに巨大であつたと推定された。

オーウェンは個別の論文を発表しながら、ダーウィンが編集し監修するシリーズ『軍艦ビーグルの航海における動物学』を執筆し、1838年2月に「化石哺乳類」第1巻を刊行した。それが本書である。

1839年11月にオーウェンはダーウィンにつぎのような手紙を書き送った。この仕事をオーウェンのいたく気に入ったことが感謝の気持ちとともにつづられている<sup>18</sup>。

「親愛なるダーウィン殿。貴殿の刊行したジャーナルにじっくりと目を通し、これほど愉しい書物が私の書架に加わったことに感謝せねばならないと感じております。たとえるならば、それは卵のようにおいしく独創的で健康な食べものに満ちており、私が愉しんだものがちゃんと消化されなかったとしたら、あまりに急いで平らげたからに違いありません。夜の薄暗がりでは疲れ目のため不承不承読みさしにしましたが、翌朝の食卓の新たな贅沢として愉しむことでしょう」。

### 3. 自筆箇所、筆跡鑑定

本書を刊行後、1838年のうちに、オーウェンの南米産化石にかんする研究は、ロンドン地質学会(Geological Society of London)により表彰され、最高位のウォラストン・メダル(Wollaston Medal)を授与された。このとき地質学会の会長であったウィリアム・ヒューウェル(William Whewell, 1794 - 1866)は授与式の壇上で、

17 マガウワン、上掲書、210頁。一部改変。ライエルの手紙の原文は、オーウェンの同名の孫により著された伝記 *The Life of Richard Owen*, London, Vol.1 and 2, 1894 の Vol.1, p. 102 でも読むことができる。 <https://www.biodiversitylibrary.org/bibliography/63812#/summary>

18 From Richard Owen [to Darwin], 11 June 1839, of Darwin Correspondence Project in University of Cambridge. <https://www.darwinproject.ac.uk/>  
原文は、Dear Darwin, / I have read far enough into your Journal to feel

that I have to thank you for the most delightful book in my collection. It is as full of good original wholesome food as an egg, & if what I have enjoyed has not been duly digested it is because it has been too hastily devoured. I leave it reluctantly—tired eyes compelling—at night, and greet it as a new luxury at the breakfast table: / ever your faithful & obliged, | Rich[ar]d. Owen. 上記のサイトによれば、少なくとも1848年まではオーウェンとダーウィンはよく手紙のやりとりをしていたようである。

ダーウィンの航海は地質学上でもっとも重要なもののひとつだったと賞讃したという<sup>19</sup>。いわばオーウェンとダーウィンのあいだの密月であった。しかし、すでにダーウィンは、何がこのような生きものを根絶やしにしたのだろうかという疑念を抱きはじめ<sup>20</sup>、ライエルを初めとする小さな仲間うちに、種の「変異」についての考えを密かに打ち明けていた。

ダーウィンはオーウェン宅にしばしば足を運び、化石を前にしてオーウェンと明朗闊達な議論を交わした。だが、後年（およそ20年後であるが）その理論ゆえにかれと疎遠にならざるをえないとは、オーウェンにはまだ知る由もなかった。

さて、本書には標題紙と15頁の2箇所オーウェンの自筆とおもわれる書き込みがある。まず表紙の右肩部分（図2）には、

To Prof. de Blainville, Memb. de l'Institut  
with M. Owen's best regards.

「(フランス) 科学アカデミー会員ド・ブランヴィル教授に オーウェンより、かしこ」

とある。

書き込みはもう一箇所あるが、それらを解説する前に、筆跡の鑑定をしておきたい。

ウェールズ国立図書館によりデジタル化された、出版物の一部とおもわれるオーウェンの肖像画には、併せて自筆の署名が印刷されている<sup>21</sup>。刊年は不明だが、この肖像画のもとになったと推定される写真は、1846年に撮影されたものと考えられる<sup>22</sup>。巨大鳥モアの脚の化石骨を手にするオーウェンである（図3）。その自署の特徴を憶えておきたい。

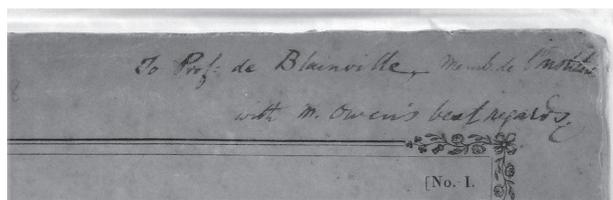


図2 標題紙上のオーウェン自筆箇所

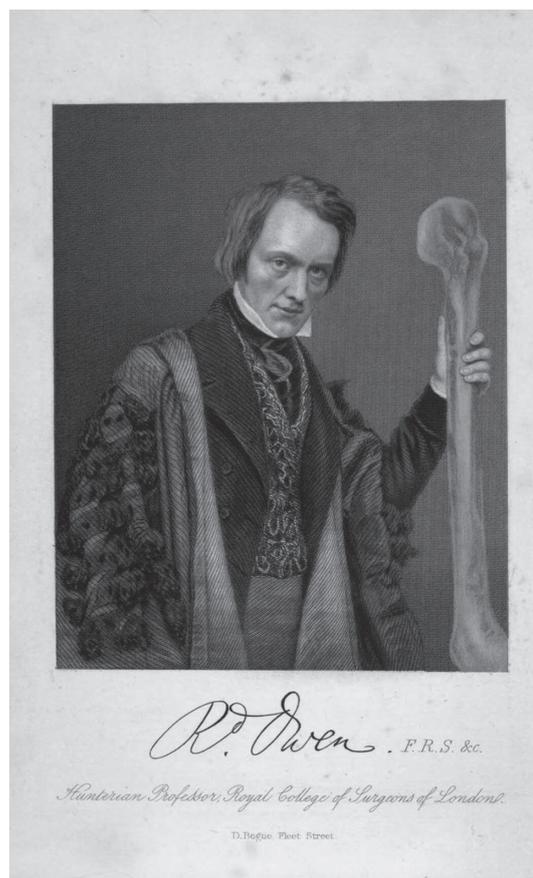


図3 オーウェンの肖像画（ウェールズ国立図書館蔵）

これを①として、後述するように、自筆箇所は1840年前後のものと推定されるので、もうひとつ、ウェブ上で公開されているオーウェン自筆の手紙のうちで、その年代に近い1841年のものを②（図4）として掲げる<sup>23</sup>。これらを当該箇所の署名と比較してみよう。

19 マガウワン，上掲書，216頁。ヒューウェルは「サイエンティスト」(scientist)ということばを創出した科学哲学者としても知られる。

20 To Charles Lyell [from Darwin], 30 July 1837, of Darwin Correspondence Project. この手紙の最後のほうで、ダーウィンは、「これらの無数の動物たちが死んでしまった原因は何と並外れて不可解なことでしょうか。それほど遠い過去でもなく、また、自然界の変化もごくわずかだというのに——」と述べている。原文は、What an extraordin[ar]y. mystery it is, the cause of the death of these numerous animals, so recently, & with so little

physical change.—

21 Llyfrgell Genedlaethol Cymru – The National Library of Wales. Public Domain Mark 1.0.

22 1846 Richard Owen and Moa Leg Fossil.

23 Letter from Richard Owen, Esq., F.R.S., F.G.S., &c &c on Dr. Harlans notice of new fossil Mammalia &c published in this journal, vol. 43, p. 141, dated Dec. 10th, 1842. in American Museum of Natural History. <http://digitallibrary.amnh.org/handle/2246/6600> この手紙は6枚からなるが、図で掲げたものはその最後の頁の右面である。

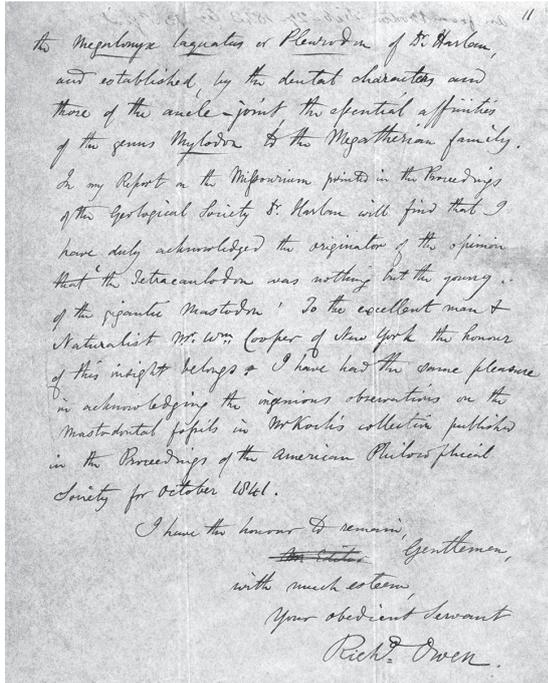


図4 オーウエンの自筆書簡(アメリカ自然史博物館蔵)

一目でわかるのは、Rich[ar]d Owenの「d」の先端を大きく丸めて飾り付ける書き方と、また、「O」の頭の部分を同じく丸めて次の「w」の書き始めへとつなげる自署である。これは①②に共通しており、本書自筆箇所「Owen」においても同じ傾向を見てとることができる。そして、「best regards」の「d」の先端を丸めて「s」につなげている箇所にも同じ飾り付けの手法が見られる。

②の手紙を見ると、オーウエンの筆記はいわゆる乱筆ではない。単語はつなげて書くが、単語どうしは切り離して読みやすい。ていねいな筆致である。本書自筆箇所を見ても、そのように見える。とくに、相手方の氏名や肩書きは慎重に書かれている。しかし、それ以外では普段の書き方の特徴が現れやすい。「d」が文末に来たさいにその先端を飾り付ける書き方は、②の随所に見ることができる。もうひとつ、「To」の「T」の書き方も、書き始めの先端で筆を止めたあと、横棒を強く書き、斜め下に払って終端を強く引き上げている。この特徴的な筆跡は、本書自筆箇所にも②の手紙にも共通している。

およそ以上の点から本書はリチャード・オーウエン直筆本と断定される。なお、「M. Owen's」の「M」とは何かと問われるだろうが、これは男性にたいする敬称である「Mr.」あるいはフランス語で「Monsieur」の略記かとおもわれる。現代の感覚では、自分に敬称を

付けるのは奇妙だが、フランス語ではよく「M.」と付けることがあり、ドイツ語でも初めて相手に手紙を書き送る場合には、「H. (err)」と自称することがある。そうした慣習にならったのかもしれない。

いずれにしても、表紙に見られるこの書き込みは、キュヴィエの後を継いでパリ植物園の比較解剖学教授となり、二名法の権威であったブランヴィル(Henri Marie Ducrotay de Blainville, 1777-1850)に本書を恵贈するため、宛名として記されたと考えられる。

つぎに、15頁にある書き込みである(図5)。ここでは、本文への註記のようなかたちで、該当箇所への\*印と波線とともに、

\*Here I followed Weiss, Buckland & De Blainville: my reasons for abandoning this view of the affinities of the Megatherioid Bruta are given in my Memoir on the Glyptodon, of March, 1839. Geol. Trans: 2de Series, Vol. VI, p. 81. R.O.

とある。

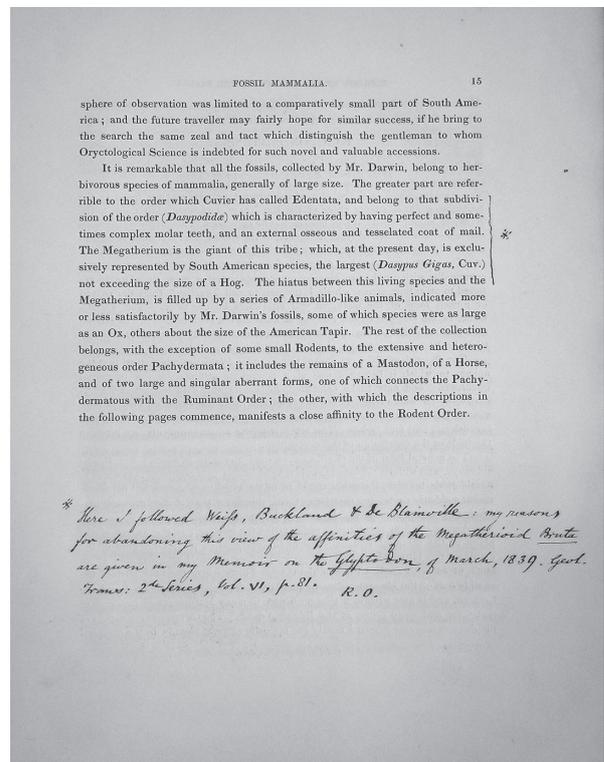


図5 本文中のオーウエンの書き込み箇所

これを訳出すれば、「※ここでわたしはワイス、バックランドおよびド・ブランヴィルに従う。メガテリウムの類縁についての見解を放棄する理由は、グリプトドンにかんする拙論（1839年3月の『地質学研究』第2シリーズ第6巻81頁）にある。R.O.」となる。

最後の「R.O.」が（リチャード・オーウェン）の略記であることは間違いないだろう。すでに述べたように、グリプトドンとは南米産のアルマジロに似た新生代の生きものであり、メガテリウムとは同じく新生代に南米に棲息した巨大なナマケモノに近縁する属（オオナマケモノ）のことである。その分類にはキュヴィエがかかわっていた。しかしながらキュヴィエは1832年に没しており、表紙の書き込みと併せて考えれば、かれの後継者であるブランヴィル教授に自分の見解を伝えることで、専門家同士の意見交換を図ったものとおもわれる。

この註記のある本文のテキストを翻訳しておこう。註記の波線にかかっている部分を（//）で囲んだ。

「ダーウィン氏により収集されたすべての化石がどれも相当の大きさの哺乳類の草食種に属していることは注目に値する。// その比較的大きなものはキュヴィエが貧歯目（Edentata）と称した目に帰せられる。また、完全かつしばしば複雑な臼歯をもち、外骨で碁盤目状の甲冑をもつことが特徴の目の下位分類（*Dasypodiac* アルマジロ）に属している。メガテリウムはこの族の巨大なものであるが、現在では南米の種にのみ見られ、最大のもの（*Dasytus Gigas*, Cuv. オオアルマジロ）でも食用豚の大きさを超えない。// この現生種とメガテリウムとのあいだのすき間はアルマジロのような一連の動物により埋められるが、ダーウィン氏の化石は、その種のいくつかは雄牛ほども大きく、それ以外もアメリカバクほどであり、多かれ少なかれ充足している」。

要するに、アルマジロ（グリプトドン）とメガテリウム（オオナマケモノ）は同種ではないようだ、註

記で意見の修正を図ったのである。これは現在でも受け容れられている説である。

そして、オーウェンはその根拠を、1839年3月に自分が発表した論文だとする。だとすれば、この書き込みは少なくとも本書の刊行後1年以上経ってからのものであり、早ければ、1843年までの『軍艦ビーグルの航海における動物学』シリーズ刊行中のことであつたかもしれない。あるいは、オーウェンの執筆担当の「化石哺乳類」第4巻刊行までとすれば、それよりも早い時期、すなわち1840年4月までには書き込んでいたとも考えられる。

#### 4. 本書の入手経路（推定）

しかしながら、ブランヴィルが本書をオーウェンから受け取ったとして、それに対して何らかの反応をしめたかどうかは不明である<sup>24</sup>。オーウェンの手稿やノートや旧蔵書などの多くはロンドン自然史博物館に収蔵され、一部は王立外科医師会にも残されているというが<sup>25</sup>、筆者管見の限りでも、それ以外にプリンストン大学図書館の Sir Richard Owen Collection、テンブル大学の同名のコレクション、そしてアメリカ自然史博物館に若干の手稿・手紙のコレクションが所蔵されている<sup>26</sup>。とはいえ、数か所に分散してはいるものの、大半は公的機関にて良好に保存されているといえる。なぜそのようなことに留意するかと言えば、本書がブランヴィルには送付されず、オーウェンの手許に残されたまま、外部に流出した可能性を憂慮するからである。しかし、反対にその可能性が限りなく小さいとすれば、本書は正しくブランヴィルのもとに届けられたが、そこから流出したといわざるを得ない。

というのは、本書はアンカット（uncut）、すなわち、折丁が冊子状に綴じつけられているが小口を切り開かれないままの状態だからである。つまりは読んだ形跡がない。オーウェンが書き込んでいる箇所は、ちょうど折丁と折丁のあいだに当たり、切り開かずともページを開くことができる。だから、そこに註記を容易に

24 上掲 The Life of Richard Owen, Vol.1, p. 179f. によれば、オーウェンは1841年1月末にブランヴィルから手紙を受け取っているが、それは9年前に発表したオウムガイにかんする研究を読んだ、という返事であった。とはいえ、オーウェンは同論文がフランス語に翻訳されて、パリで検証されたことに喜んだという。総じてブランヴィルとの交流は盛んなものではなかったようである。

25 上掲, Encyclopedia.com の Wesley C. Williams による, Complete Dictionary of Scientific Biography, 2008 の Bibliography 参照。Natural

History Museum における The Richard Owen collection 成立の経緯とその内容については、下記を参照。https://www.nhm.ac.uk/our-science/departments-and-staff/library-and-archives/collections/owen-collection.html

26 プリンストン大学のオーウェン・コレクションは、https://rbsc.princeton.edu/collections/sir-richard-owen-collection、テンブル大学のコレクションは、https://digital.library.temple.edu/digital/collection/p15037coll18、アメリカ自然史博物館のコレクションは、筆跡鑑定で使用した手紙②の註記を参照。

書き込むことができたのである。

これを受け取ったブランヴィルはどのように反応したのだろうか。かれも同様に、その註記箇所だけは目にするのができただろう。すでに同じタイトルの書籍を手にしていただければ、かれとしてはそれで十分だったのかもしれない。

ブランヴィルの旧蔵書がどこかにまとめて収蔵されているのか、あるいは散逸した状態なのかについては、本稿の範囲をこえるので今後の調査を俟つかない<sup>27</sup>。

それでは、本書がブランヴィルのもとから流出したとして、東北大学附属図書館にはどのようにして所蔵されるにいたったのだろうか。

冒頭で述べたように、本書は北青葉山分館で偶然に発見された。同分館は1911年(明治44)の東北帝国大学理科大学開設以来の歴史的な蔵書が収蔵されており、それらは数学、物理、化学、地質学・古生物学教室などの旧学科図書や、初代教授のひとりであった矢部長克(やべひさかつ)の集書にかかる文庫など、とくに戦前の蔵書にかんしては利用の都合などを考慮して電動集密書架にあつめられている。本書はそのうちの「地質旧蔵書」の書架におさめられていた。

表紙下部にはそれまでの分類にしたがった3種類の排架記号などが貼付されている(図6)。

もっとも古い層とおもわれる分類は左下のブルーブラック・インクによる押印であり、「函37 棚4 No.7 東北帝國大學地質學古生物學教室」と読める<sup>28</sup>。また、背表紙下部に貼付されているラベルには、印刷と押印により、(破断されて読みにくいが)「単行本 o.5 東北大学理学部地質学古生物学教室」とある。理科大学は1919年(大正8)に理学部となるが、「東北帝国大学」ではなく、「東北大学」とあるので、これは戦後1949年(昭和24)の新制大学制度により東北大学理学部となつてから分類し直されたのであろう。帝国大学時代には蔵

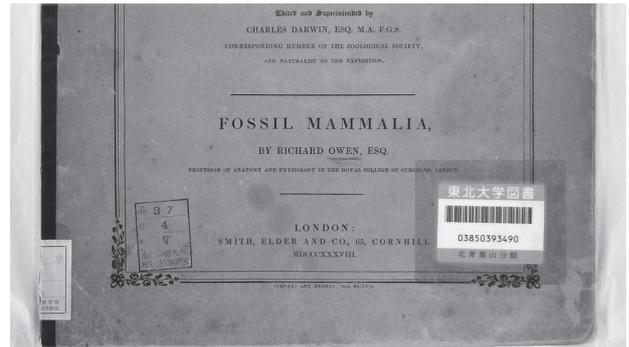


図6 表紙下部の排架記号等

書の多くは各学科の図書室で管理されることが通例となっていたので<sup>29</sup>、新制大学になり図書分類法が改められても図書室での管理についてはとくに変化がなかったとおもわれる<sup>30</sup>。

その後各学科図書室および中央図書室の蔵書は、理学部の片平キャンパスから現在の青葉山キャンパスへの移転に伴い、1985年(昭和60)に竣工した同分館に収蔵されることになった。表紙右下の算用数字とバーコードのシールは、貸出・返却手続きの電算化のため1990年代以降に貼付されたものである。

さらに、見返し紙(paste-down-endpaper)にもいくつかの押印等がある(図7)。

最下部に「Institute of GEOLOGY & PALEONTOLOGY, Tohoku Imp. Univ., Sendai, Japan」(東北帝国大学地質学古生物学教室, 仙台, 日本)の押印があり、その上には表紙と同じ、バーコードはないが算用数字だけの電算化用の分類が貼付されている。最上部の旧分類は、より新しい分類(「単行本」)のために×印で消印されている。

重要なのは、中央に捺された図書館の受入印である。「東北帝國大學圖書館 洋 甲 33970 大正十二年五月廿四日受領」とある。すなわち、1923年(大正12)5月24日に図書館に登録されたことをしめしている。

27 おそらくパリ植物園(Jardin des Plantes)には継承されているとおもわれるが、ウェブ上で確認できるのは胸像だけであった。

28 うら表紙にもこの押印と同じ分類が切手状の紙に印刷されて貼付されているが、分類は不完全で「函」の項目に「37」と押印されているのみである。

29 東北大学史料館の写真データベースには、「理科大学 地質図書室/大正2年(1913)頃」との標題のモノクロ写真が収録されている。

30 ちなみに、「函」とはいまで言う書架にあたるもので、「棚」

はそこに嵌めこまれている書棚ということであろう。書名・著者名などには運動していないので、別に目録を作成して照合するしかなかったはずである。戦後は著者「Owen」の頭文字「O」, すなわち著者標目でアルファベット順に並べられた。この分類法は1972年に現在の附属図書館ができると国立国会図書館の分類法をもとにしてさらに新たなものへと改められたが、分館や学科図書室等の蔵書はその影響を受けなかったようである。(カード体目録には「VIII/G8」と分類されたものが見つかっているが活用されなかったとおもわれる。Gの意味も不明である。)



図7 見返し紙上の押印等

言うまでもなく、「洋」は洋書、「甲」は（寄贈ではなく）対価をもってする購入という意味である。算用数字 33970 は図書館の原簿上の登録番号と対応しており、それによれば本書の納入者は「藤原佐吉」、価格は「8 圓」であった。

藤原佐吉とは仙台の老舗書店である金港堂の創業者であり、1910 年（明治 43）11 月 3 日に仙台大町 4 丁目に開店した<sup>31</sup>。

以上の押印等の分類・管理法を時系列で並べれば、つぎのようになるだろう。本書は 1923 年（大正 12）ま

で購入され、まず図書館で登録作業がおこなわれた。そして学科図書室である地質図書室に移送された。そこで「Institute of GEOLOGY &…」の押印がなされ、同時に「函 37 棚 4 No.7」に分類され押印され書棚におさめられた。戦後に分類法が変更されて新たな排架記号ラベルが背表紙に貼付されたが、そのまま同じ図書室で管理され、1985 年（昭和 60）になって各学科図書室の蔵書が北青葉山分館にあつめられると、「地質旧蔵書」の一冊として、他の「旧蔵書」とともに一括して書架に並べられたのである。

ところで、このオーウェン自筆本『軍艦ビーグルの航海における動物学』は、アンカットである上に、販売書店やそれ以前・以後に所蔵した個人、古書肆、図書館などの蔵書印なども見当たらない。すなわち、金港堂はともかくとして、ブランヴィル以後にどのように經由したかの痕跡がない。そして、同タイトルは全 5 部 19 冊で構成されるはずのものにもかかわらず、東北大学附属図書館に本書第 1 部「化石哺乳類」第 1 巻しか所蔵されていないのは、いったいなぜなのだろうか。

つまり、本書の「購入」にかかわったのは誰なのか、ということである。

原簿上の納入者は藤原佐吉であった。しかしながら仙台の金港堂は、おもに教科書販売・出版をなりわいとする（暖簾分けであったとはいえ）在来の書店である<sup>32</sup>。これは仮説であるが、大学の研究者が個人的にすでに入手していたものを図書室に排架するために、あるいは研究ないし運営経費上の都合から、書店を経由させたのではないか。

というのは、原簿には本書と同年同月同日に 13 件（17 冊）の書籍が登録されており<sup>33</sup>、その大半がフランス語

31 藤原佐吉は、それまで横浜にあった教科書出版社の「東京 金港堂」から暖簾分けされたという。金港堂とは、金のなる港という意味で、横浜を発祥とする。のちに東京に移転し、そこから地方への展開を図った。下記 url の記事「本屋の火を絶やさないうために、やれることを」を参照。http://navi-s.com/web/shopping-street/635/

32 東京の金港堂本店が、かなり広汎に教科書等の出版販売に携わっていたことは、稲岡勝『明治出版上の金港堂 社史のない出版社「史」の試み』皓星社、2019 年に詳しい。

33 登録番号 33953 から 33970 まで。この最後の登録番号が本書にあたる。以下に書誌と所蔵箇所、排架記号をしめす。(33953) Etude des mammifères fossiles de saint-gerand le puy (allier) / Par M.H.Filhol (Bibliothèque de l'Ecole des hautes études, section des science naturelles; t. 19, 20 article no. 1,2), Paris, 1879-80 北分地質旧蔵書 F/9, (33954) Memoires sur quelques mammifères fossiles des phosphorites du Quercy / par M. H. Filhol, Toulouse, 1882 北分地質旧蔵書 F/3, (33955) Recherches sur les phosphorites du Quercy : étude des fossiles qu'on y rencontre et spécialement des mammifères /

par H. Filhol, Paris, 1877 北分地質旧蔵書 F/10, (33956-7) Histoire des crustacés podophthalmiques fossiles / par Alphonse Milne Edwards, Paris, 1861-65 北分 2・3 階集密書架大型本 t.1: e/3; monographies: e/2, (33958) Flore carbonifère du département de la loire et du centre de la France / par M. F. Cyrille Grand'eury, Paris, 1877 北分地質旧蔵書 pt. 1 古植物 /A/70, (33959, 33960) Scientific transactions of the Royal Dublin Society. Ser. 2 北分地質旧蔵書 4 (14-1), 5 (4-2), 1892-1894, DA/10-1, DA/10-2, (33961) L'éocène inférieur en Aquitaine et dans les Pyrénées / par M.H. Douvillé (Mémoires pour servir à l'explication de la carte géologique détaillée de la France), Paris, 1919 北分 2・3 階集密書架大型本 d/11, (33962-3) Études paléontologiques sur le nummulitique alpin / par Jean Boussac (Mémoires pour servir à l'explication de la carte géologique détaillée de la France), Paris, 1911, 2 v. 北分地質旧蔵書 Texte: b/23; Atlas: b/24, (33964) Mission d'Andalousie / par W.Kilian, Paris, 1889 北分地質旧蔵書 K/27, (33965) Pélécy-podes du montien de Belgique / par Maurice Cossmann, Bruxelles, 1908 北分 2・3 階集密書架大型本地質 / 大型 /12, (33966) The British

による古生物学専門書であったことが判明したからである。もっとも新しいものは1919年に刊行されている。このような専門書のひと山をピンポイントで収集することは、はたして仙台の書店に可能だったのだろうか。

東北帝国大学理科大学地質学古生物学教室の初代教授はすでに述べたように矢部長克 (1878 - 1969) であり、1911年 (明治44) の開設より1940年 (昭和15) の停年退官まで同教室を主導した。開設に先立ち1908年 (明治41) 2月からヨーロッパの在外研究に出発し、およそ4年後の1912年 (明治45) 3月に帰国するが、開設に間に合わず在外のまま教授に任じられた<sup>34</sup>。このときの旅行はベルリンからオランダ、ベルギー、スウェーデン、ウィーン、ローマなどの各地をめぐるっており、まさにグランドツアーさながらであった<sup>35</sup>。それ以外にも1915年 (大正4) にニューヨークに旅している。矢部は各地で購入したり譲渡されたりした多くの標本や図書を持ち帰ったようで<sup>36</sup>、大半は学科の標本室・図書室におさめ、そして私的にも所蔵した<sup>37</sup>。

その後まもなくして1914年 (大正3) に松本彦七郎 (1887 - 1975) が講師として赴任し、古生物学を引き受けるようになった。松本は1920年 (大正9) に助教授になると一年あまりの在外研究を経て1922年 (大正11) 1月に教授に任ぜられた<sup>38</sup>。在外研究は「古生物学研究のため」、その渡航先は「英米独各国」であったという<sup>39</sup>。帰国直前の1921年 (大正10) に地質学科は地質学古生物学教室から岩石鉱物鉱床学教室が分離し<sup>40</sup>、

前者では地質学講座を矢部、古生物学講座を松本が担当することになった。同年、松本は蛇尾綱 (クモヒトデ) の新分類法の研究で学士院賞を受賞しているが、そのころの松本は「もっぱら哺乳動物化石の研究に従事して」いたという<sup>41</sup>。

松本は古生物学にとどまらず動物学、地質学、考古学、人類学など多方面での業績を残したが、1933年 (昭和8) に休職し、1935年 (昭和10) に退官した。

以上のように、松本彦七郎が在外研究を終えて1921年 (大正10) に帰国し、教授として同教室に戻ってきたことが、時期的にも、研究分野から見ても、本書との関連が大きいようにおもわれる。であれば、このとき松本は、イギリス、ドイツ、アメリカ合衆国以外にフランスにも立ち寄っていたのだろうか。その具体的な記録は残念ながら確認できなかったが、同時に登録された書籍を調査したところ、そのうちの2冊に、当時フランスのパリを拠点とした学会の「文庫」蔵書印の捺されたものを発見した<sup>42</sup>。それらが放出された経緯も正確には判らないが、おそらくは学会の解散によるものであろう。とはいえ、遠くフランス国外にまで流出したとは考えにくい。何よりも、ブランヴィルの旧蔵書が流出していたとすれば、まずはパリ周辺であった可能性は高そうである。とすれば、松本は、ヨーロッパ留学中に、研究に関係するさまざまな書籍を熱心に探しもとめるなかで、「化石哺乳類」にかんする本書を、偶然であれ入手したのかもしれない。

Carboniferous Orthotetinae / by Ivor Thomas ... Pub. by order of the lords commissioners of His Majesty's Treasury (Memoirs of the geological survey of Great Britain; Palaeontology; vol. 1, pt. 2), London, 1910 北分地質旧蔵書 T/16, (33967-8) Monographie du genre ostrea : terrain crétacé / par H. Coquand, Marseille, 1869, 2 v. 北分地質旧蔵書 text: 地質 /46; 北分2・3階集密書架大型本 atlas: 地質 / 大型 /10, (33969) Histoire Naturelle des Crustacés Fossiles : sous les Rapports Zoologiques et Géologiques / les Trilobites par Alexandre Brongniart, les Crustacés Proprement Dits par Anselme-Gaétan Desmarest, Paris, 1822 北分2・3階集密書架大型本 b/28, (33970) The Zoology of the voyage of H.M.S. Beagle, under the command of Captain Fitzroy, during the years 1832 to 1836 / edited and superintended by Charles Darwin, London, 1838 北分地質旧蔵書 o/5.

34 浅野清「東北大学理学部地質学古生物学教室小史」『地学雑誌』93 - 6 (1984年), 59頁以下参照。  
35 矢部長克「日本地質学界の思い出と我が生い立ちの記 付 欧州旅行記」『日本古生物学の回想』日本古生物学会, 1970年, 9 - 33頁参照。  
36 矢部は、「仙台の教室を作る時に古生物関係の図書は相当に買い集めた」とする。上掲書, 23頁。  
37 当時の標本室のようすは、東北帝国大学開学式の参観案内の記に詳しい。『河北新報』の記事からの引用として、「イクシオサウルス、グリプトドン脊甲、ウルサスレウス頭骨、パレオマストドン、プロゾイグドン、シバセリウム等が重なるもので、

就中数千円を投じ漸く独逸から購入したイクシオサウルス (所謂龍の一種) の化石は壁間に掲げられてあり、グリプトドンの脊甲と共に日本には無論世界にも稀れなものであるから見落とさぬようにすべしである」(原文ママ)。『東北大学五十年史』上, 103頁以下。現在では標本室の所蔵品は総合学術博物館に、私的な蔵書は矢部文庫として北青葉山分館に一括所蔵されている。

38 松本の在外研究は、1920年7月9日に横浜より出航し、翌1921年12月1日神戸に戻っている。洋上での時期も併せれば1年半近くになる。松本の1935年 (昭和10) までの詳細な経歴については、松本子良『理性と狂気の狭間で』北日子良, 1985年, 185 - 191頁。

39 読売新聞1920年 (大正9) 7月7日付朝刊第2面「人事消息 (6日)」

40 公式には1924年 (大正13) に分離。

41 上掲『東北大学五十年史』上, 646頁。一部表記を改めた。

42 上記にしめした同時納入の書籍の大半はおそらく購入後に再製本され、入手時の状態をほとんど保持していなかったが、登録番号 (33964) の書籍の標題紙上部には、「Feuille des Jeunes naturalistes」、また (33969) の見返し紙にも「Bibliothèque de la Feuille des Jeunes naturalistes」の押印があった。このフィユ・デ・ジュネ・ナチュラリストとは、「若き自然学者の葉」(紙葉の複数形、転じて論叢) というほどの意味で、20歳で夭逝したエルネスト・ドルフュス (Ernest Dollfus) なる人物によって創刊された学会誌の名称でもある。同誌はパリを拠点に1870年から20世紀初めまで発行された。

## 5. おわりに

かくて、松本彦七郎の持ちかえった一連の書籍は、研究利用のため再製本され、1923年(大正12)に金港堂・藤原佐吉を経由して附属図書館に納入された。しかし、他の書籍が、この再製本によってことごとく当初の表紙をうしなったのに対し、本書がその工程をまぬがれ、なかみを読むために小口を切り開かれさえしなかったのは、その価値のありようを、少なくとも当時その教室にいた人びとは判っていたと考えてもおかしくはない。

そのおよそ100年後の2019年(令和元)、本書の存在を再発見したのは三角太郎・附属図書館情報サービス課長であった。三角課長は東北大学理学部地質学古生物学教室の出身であり、二十年ぶりに東北大学に職員として戻って2年目である。これまで本書の価値を語る者はなかった。しかしながら、とくに誰が知るといふこともなく、書架で初期の状態を保持してきた。今回の発見は、まさに奇縁というほかない。本書は、すでに本学において貴重図書指定されているダーウィンの『種の起源』初版とともに、高い稀少性および「名家」の自筆にかかる資料として貴重図書に指定されるのが相応しいだろう。

最後に、貴重書係の菊地良直係長と同係の須田洋子さんには、このたびの調査へのご協力に深く感謝する次第である。

### ※追記

本稿脱稿後、2019年12月20日に開催された本学貴重図書等委員会において、本書は貴重図書に指定された。

Summary: Richard Owen's autographs on "The Zoology of the Voyage of H.M.S. Beagle: Fossil Mammalia Part 1, No. 1." discovered in Tohoku University Library in 2019. This book was delivered in 1923 by Sakichi Fujiwara, founder of Kinkodo-Bookseller in Sendai, Japan. But probably it would be obtained by Professor Hikoshichiro Matsumoto, a paleontologist at Tohoku Imperial University, during studying on abroad. This book was presented from Richard Owen to Henri Marie Ducrotay de Blainville. The process of his parting with this book is still unknown.

(おがわ ともゆき, 学術資源研究公開センター  
総合学術博物館助教・附属図書館協力研究員)